

がん哲学外来レポート

## メディカルカフェスタッフ体験記

がん体験者が本音で語り合い、自らの生き方を考える場「がん哲学外来・メディカルカフェ」が全国に広がっている。カフェを運営するスタッフ（全員ボランティア）の体験をお聞きする。



## 心の焼け野原からの復興

中里準治

なかざと じゅんじ  
新渡戸稲造記念さっぽろがん哲学外来代表

さて、この13年はわが家にとつてまさに激動の時代でした。2人の子どもたちはカミサンが死んで間もなく独立したので、私は唐突に一人暮らしになりました。会社を早めに辞め、札幌から道北の小平町おひらという人口3500人ほどの過疎の町に友人のつてを頼って引っ込みました。

生存率としてはいい数字であったはずなのに、どうして死んでしまったのか。要は、がんは極めて個性的、個別的な病気であるということ。数字どおりに推移する人もいれば、そうでない人もいるということです。そして個性的、個別的な病気であるがゆえに、治療もまたそうあるのが理屈です。ならば、オールジャパンで個人別の治療データベースを作り、患者さんの治療データを類似の患者さんの治療に活用すれば、今より助かる人は間違いなく増えるはず。です。

札幌で「新渡戸稲造記念さっぽろがん哲学外来」のスタッフというボランティア活動を3年ほど前からしています。今年の4月で65歳になりますが、カミサンが3年間の闘病のすえ乳がんで亡くなってこの5月で早くも10年になります。ですから、私と「がん」との付き合いは13年ほどになります。

### 妻の死と残された者の思い

カミサンは診断時点では5年後生存率は88%でした。初期がんだったので、治療をきちんと受ければ大丈夫だろうと軽く考えていました。しかし、最初に定番の外科手術を受けたわずか2カ月後に再発、その後

は放射線と長期にわたる抗がん剤治療を受けることになりました。一時はがんが消えたという朗報に沸き立ち、その後再発という地獄に真つ逆さま。まるでジェットコースターに乗ったような3年間の後、文字通り矢尽き刀折れ、最後の最後まで闘いをやめずに彼女は死んでいきました。

下の娘の初めての子はカミサンの死の翌月に生まれたので、カミサンが苦しい抗がん剤治療の合間に進めていた赤ん坊の肌着の用意だとかの母娘の間の約束事は中断されたままになりました。

残された私たち親子3人は、口には出さなくてもそれぞれにカミサンの面影を今でも追い求めているのがよくわかります。愛する者の喪失は、ちやうど、爆撃で一面焼け野原になってしまった街の片隅で膝を抱えて一人うずくまっていた孤児のように、心細く、寂しく、悲しく、また持つて行く場のない怒りをたっぷり味わうことです。でも、悲しみを十分味わうことにより、誰でもいつかは立ち上がり、自分なりに心の焼け野原の復興ができるようになっていきます。

## 思いの共有を

がん哲学外来の創設者、樋野先生との出会いは15年ほど前になります。先生は新渡戸稲造と内村鑑三の研究者でもあり、新渡戸顕彰を図る札幌の有志の集まりが初対面の場でした。その後、先生ががん哲学外来を東京で始められ、先生の命名による「新渡戸稲造記念さつぽろがん哲学外来」とい

う名誉ある看板のついたカフェを札幌に開くことになりました。

カフェは私を含め4名の事務局スタッフで2013年8月からスタートし、偶数月に1回、15名ほどの患者さんやご家族の人たちで例会を開いています。その後、対外窓口の一本化が必要になり、昨年から代表役を仰せつかっています。

「人間には死ぬという大切な仕事が残っている」と樋野先生は時々言われます。また、「人生の目的は何か。それは品性の完成だ」とも。この2つの言葉は新渡戸探求とともに内村鑑三の名著「後世への最大遺物」を先生が熟慮熟考した結論的な言葉だと勝手に思っています。がん治療うんぬんではなく、がんを通して、死という一大事を真っ向から考えるのがカフェの真骨頂であり、妻を亡くした私が活動に参加する動機です。

この活動を始めてわかったこと、気付かされたことに「思いの共有、共感」の大切さがあります。当事者に、「苦しい、あるいはつらいのはあなただけではない」と言うことは恐らく真実であり正しい忠告でしょう。しかし、相手がまさに狙い撃ちされたように悲しみの中に沈んでいる時に言うべき言葉ではありません。相手が「つらいの

は自分だけではない」ことに気持ちに向かうようになった時にまさに共有、共感の表明として、「あなただけではない、実は私もなのです」と言うべきなのでしょう。

フットプリント（足跡）というすばらしい詩があります。その最後の部分は「わたしの大切な子よ……あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。足跡がひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いてきた」というものです。私たちの活動もかくありたいものです。

## がん哲学外来の生みの親 樋野興夫の「言葉の処方箋」

ひのおきお／順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授  
一般社団法人がん哲学外来理事長



### 最後まで見捨てないのは家族だから

中里さんとは新渡戸稲造の顕彰・学習活動の中で出会い、彼はその後に奥様の闘病という大変厳しい状況を経験されました。がんの大変さは、当人ばかりでなく家族の生活も一変させることです。さまざまな患者と出会ってきた中で思うのは、「最後は家族。最後まで見捨てないのは家族」ということです。中里さんは夫として覚悟を決めて奥様の闘病に寄り添いました。そしてその経験が今、札幌でのカフェにつながっています。